



新企画 〈文学忌〉

かつて市民の間で行われていた「まるめろ忌」(高木恭造)、「幻花忌」(今官一)などの文学忌が衰退の一途をたどっています。そこで、今年度からの新企画として「文学忌」を実施することとなりました。

「文学忌」は、郷土文学館の常設作家 10 人に、ゆかりの作家である長部日出雄を加えた 11 人の各忌日に行います。弘前ゆかりの作家を広く知っていただくため忌日は無料開館とし、忌日の前後 1 週間はロビー展示を開催いたします。

6 月 3 日の「文学忌 佐藤紅緑」では、俳句の師である正岡子規との深い関わりを、それぞれの書簡より



新資料紹介

今年度収蔵した太宰治『駈込み訴へ』を紹介します。太宰の 50 冊ある初版本のうちの一冊で、限定 300 部のみ出版された貴重なものです。「駈込み訴へ」は創作集『女の決闘』に収載されていましたが、後に私家版として出版されています。

この作品は太宰の妻・美知子夫人の「御崎町から三鷹へ」によると、太宰が口述し美知子夫人が筆記したとされています。淀みも言い直しもなく、言った通りの筆記がそのまま文章になり、「私は畏れを感じた」と回想しています。主人公ユダのキリストに対する愛憎入り混じる鬼気迫る訴えは迫力を感じさせます。



文学散歩 大鰐編

作品の舞台を訪ねて

いで湯の里・大鰐。田山花袋、竹久夢二、太宰治…。多くの文人が訪れ、いで湯につかり、その風情を作品に描いています。それら文学作品の舞台をたどります。

日時：令和 2 年 10 月 10 日 (土)
講師：櫛引洋一 (企画研究専門官)
集合時間：9 時 15 分 (9 時 30 分発の電車に乗車)
集合場所：弘南鉄道 中央弘前駅
主な見学場所：茶臼山公園、大町桂月歌碑、ヤマニ仙遊館
参加料：無料
申込締切：令和 2 年 10 月 7 日 (水)

お申し込み、お問合せは文学館窓口、またはお電話 0172-37-5505 まで

抜粋して紹介。6 月 19 日の「文学忌 太宰治」では、桜桃忌の成り立ちと、朱麟堂(太宰の俳号)を中心に取り上げました。

7 月 23 日の「文学忌 葛西善蔵」では、文学碑除幕式の写真や善蔵忌の寄せ書きなどを展示し、かつて津川武一が主導していた善蔵忌の軌跡を辿りました。

(5 月 18 日開催予定の「文学忌 平田小六」は、新型コロナウイルス感染防止に伴う閉館のため、中止となりました。)

▶ 今後の文学忌 ()はロビー展示期間

- 陸羯南 9 月 2 日 (9 月 1 日~7 日)
- 一戸謙三 10 月 1 日 (9 月 26 日~10 月 2 日)
- 石坂洋次郎 10 月 7 日 (10 月 3 日~9 日)



『駈込み訴へ』
月曜荘私家版 昭和 17 年 1 月 1 日

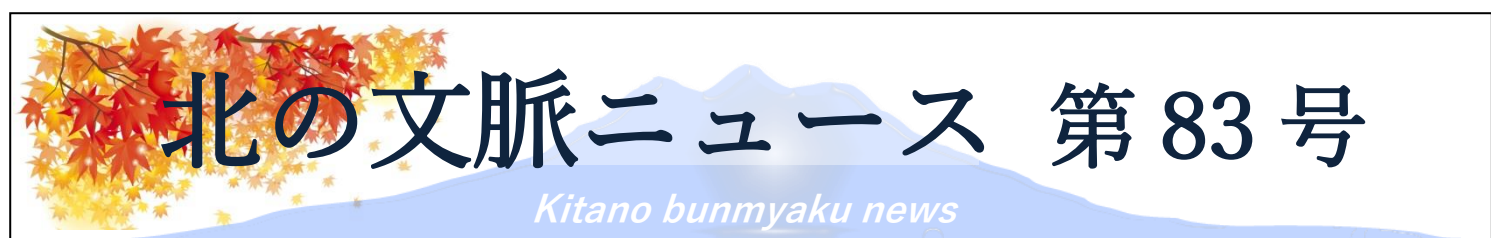
外箱の内側に「限定三百部」とある

無料映画上映会

「草を刈る娘」

石坂洋次郎原作「草を刈る娘」を吉永小百合主演で映画化した作品を上演します。岩木山麓で撮影された青春物語をお楽しみください。

日時：令和 2 年 10 月 24 日 (土)
上映時間：午前 10 時~11 時 30 分まで
会場：弘前市立図書館 2 階 視聴覚室
参加料：無料
定員：25 名
申込締切：令和 2 年 10 月 20 日 (火)
※マスクの着用にご協力ください。



弘前市立郷土文学館 開館 30 周年記念 記念講演会 「石坂洋次郎の逆襲」 講師 三浦雅士氏 (文芸評論家)

8 月 4 日、開館 30 周年を記念した講演会が、弘前市立観光館多目的ホールで開催された。講師は文芸評論家の三浦雅士氏。1946 年、青森県生まれ。図書出版・青土社設立および詩誌第二次『ユリイカ』創刊にかかわり、72 年から編集長、75 年から『現代思想』編集長に転じ、82 年に退社、批評家となる。文学、思想、科学、演劇、バレエと幅広い範囲の批評活動を行い、現在は月刊『ダンスマガジン』の顧問を務める。著書に『メランコリーの水脈』(サントリー学芸賞)、『身体の零度』(読売文学賞)、『青春の終焉』(伊藤整賞、芸術選奨文部科学大臣賞、恩賜賞)などがある。

講演は、近著『石坂洋次郎の逆襲』(講談社・2020 年)を中心に展開した。その中で最も重要な 3 つのテーマが①折口信夫(民俗学)とのかかわり、②共産主義に対する疑い、③家族(愛着)の問題 である。

慶応義塾大学で折口信夫の警咳に接していたとされる石坂は、「強い女性こそ、実は日本古来の姿であった」という認識を強めることとなる。折口が示した「母系制への奥深い広がり」は、本州最北端という苛烈な環境で生き抜く「津軽の女性」を間近で見っていた石坂の関心の中心であった。民俗学的な観点から石坂を論じるだけでも豊かな展望が広がるはず、と三浦氏は指摘する。

また、大正教養主義の流れが昭和初期の共産主義運動をつくり、世間で過熱していく中で、石坂は共産主義の根底に男性中心主義が流れているという疑いの目を持っていた。それゆえに、本来は石坂と相性がいいはずのフェミニズムだが石坂には冷淡で、石坂もまたフェミニズムに対して何の反応も起こさなかった。

石坂が描き続けてきたのは「家族」である。親密性・協調性といった「愛着」が核となって形成されたものが「家族」であり、人間が解決しなければならない一番重要な問題であると認識していた。石坂の全作品は、主体的に生きようとする女性たちがどのように「新しい家族像」を作り上げるか、その様々な試行錯誤を温かく見守ったものと要約することができるのだ。

これら 3 つのテーマに共通するのは「懐かしさ」であり、「懐かしさ」の根本には「距離」という人間にしか持ちえない概念が存在している。たとえば、「乳母車」という作品では、主人公が腹違いの赤ん坊を抱き上げて涙を流す場面がある。母乳の匂いを感じながら俯瞰化して(「距離」をとって)いくと、「自分も父も母も、もともとは赤ん坊だったじゃないか」という、世間体や人間関係のしがらみといった社会的レベルを超越した次元に到達する。これこそが「懐かしさ」であり、石坂が好んだ手法であると氏は強調する。

この「懐かしさ」「距離」に注目して浮かび上がってくるのが、「宮崎駿との共通性」である。宮崎の作品には主体的に動く女性が多く登場するだけでなく、俯瞰化することで、人類が引き起こした環境問題や共産主義、生命の実存、母への郷愁といった要素が表出するのである。

「石坂が 70 年代を境に語られなくなったのは、あくまで表現の手法を変える段階に差し掛かっていただけであり、石坂が描きたかったものや抱えていたテーマは、アニメーションという姿に形を変えて宮崎の中に脈々と息づいている。それを考えると、まさに石坂洋次郎が逆襲に出るべき時なのでは」と締めくくった。

感染症対策のため、講演会は収容可能人数の半分での開催となったが、早期に募集を終了するほどの盛況ぶりだった。参加者アンケートには、新たな視点で石坂を再読したいという声や、再講演を熱望する声が多く寄せられた。



講師の三浦雅士氏

第 44 回企画展「岩木山と文学 - 弘前市立郷土文学館開館 30 周年記念 -」

記念トークイベント
山と文学 ～根深誠×藤田晴央

令和 2 年 7 月 18 日（土）、弘前市立観光館多目的ホールにて、第 44 回企画展「岩木山と文学」記念トークイベント「山と文学 ～根深誠×藤田晴央」が行われた。出演者の根深誠さん（登山家・記録作家）と藤田晴央さん（詩人）は弘前市出身で旧知の仲。分野は違うものの山に魅せられて、その経験を数々の作品に残している。それぞれの山に対する思い、影響を受けた作品など文字通り「山と文学」についての楽しいトークが繰り広げられた。

根深さんは「『文章を書く・本を読む・山に登る』の 3 点セットが一つになって『山』になっている。それは高校生の頃からやっていた」と言う。ヒマラヤ登山のエピソードでは、新田次郎は「三千メートル以上には善人しかいない」と書いているが悪人もいる話や、昔はメールランナー（飛脚）で一ヶ月かかる手紙も今はスマホで顔を見ながら会話出来るが「自分は不得意」と笑いを誘った。また、ヒマラヤ奥地の村に村民悲願の鉄橋を架けたこと、河口慧海（日本人初のチベット入境者）がどのルートでチベットに入境したのか？（現在も調査中）など山男らしい数々の逸話で参加者を楽しませた。その反面、「仲間が登山で亡くなり、自分だけが生き残るという事を経験しても“山”を捨てきれない。これを責務とし、十字架を背負って生きている」という自身の根底にある部分も語った。そして、執筆の際は ①フィクションを入れない、②事実をして語らしめる、③事実で組み立てて書く、を基本とし、「古い言葉が好きだから昔風の文章で書く」と語った。

藤田さんは、自然と人間の心の変化が一体化されている作品に魅力を感じ、明治・大正・昭和と多くの山岳文学が書かれてきた中で、特に小島鳥水の『日本アルプス』は名著であり、登山を文学的な文章で表現している、と指摘。それらを読んでいると「山を通して哲学をしている感じがし、登山によって宇宙を感じ、登山は哲学につながる。ふだん町で暮らしている人は平地で感じられないものを感じるのではないかと持論を展開した。根深さんの「山ボケ」の話には「山にいる方が本当の人間で、町に下りると違った人間になるのでは（笑）」と返し、立原道造の詩や『ハイジ』のアルプスについての描写など広い観点から「山と文学」について語った。また、ブナの葉のさやぎや、谷底から風で湧き上がる木の葉は感動的だと、詩人らしい面を見せ、自作の「山肌」（『森の星』思潮社）を朗読し、参加者は皆聞き入っていた。

「『岩木山』について抱いている思いを一言」の問いに、根深さんは「故郷の山、山心を植え付けたのが『岩木山』だった。改めていい山であり感謝しかない」と語り、藤田さんは「心和らぐ所。高い部分と裾野の両方の魅力があり、山頂部分は時としてどこか遠くの高山であるかのような想いを駆り立て、裾野は林檎畑もあり人々の暮らしを感じさせる。自分の人生と絡めると『新約聖書』の中の『放蕩息子の帰還』と重なる。『岩木山』は『放蕩息子が帰って来た時に父のように迎え入れてくれる山』である」と語った。

最後に「『山』とは？」の問いに、根深さんは「若い頃とは体力的に違うのでこれからは、思考を重ね『山』を捉えていきたい」、藤田さんは「眺めても山の中に入っても無心になれるところが『山』である」と結んだ。

そして今回の企画展には根深さんの特別寄稿「岩木山」、藤田さんの書下ろしの序詩「岩木山」を御執筆いただいた。ありがとうございました。



記念トークイベントの様子

参加者のアンケートより

参加したきっかけは「岩木山が好きだから」「両講師の話聞いてみたかった」の意見が多かった。感想は「山の魅力が伝わり、登山したくなった」「軽妙なトークで楽しかった」との意見をいただいた。

記念トークイベントにご参加、アンケートにご協力ありがとうございました。

「北の山嶺」未来図への原動力

「遠山の線に今かも触れむとし赤さも赤し入日の大きさ」 小山内時雄

25 年ほど前、小山内時雄先生（青森県近代文学館初代館長）を車にお乗せし、青森から弘前に向かう途中のことであった。弘前に近づくにつれ、岩木山の姿が大きく迫り来て、その稜線に今しも真っ赤な夕陽が触れようとするその時、先生は夕陽を指差して叫ばれた。「この一瞬だよ！」冒頭に掲げた短歌は、先生が若き日に『新萬葉集』（昭和 12 年～14 年・改造社）に入集した一首であった。岩木山の稜線に沈んでいく美しい夕陽を見るたびに、今は亡き先生の言葉の一つ一つがはっきりと甦ってくる。

小山内先生が繰り返し説かれたのは、資料の収集・保存の大切さであった。大正 12 年の関東大震災により新聞・雑誌が灰燼に帰したのを慨嘆した宮武外骨（1867～1955・香川県）が、東京帝国大学・明治新聞雑誌文庫設立を期して和服にリュックを背負って各地を回り、寝食を忘れて文庫の充実に尽力したことを例に、資料収集・保存の大切さを説かれた。「青森県の作家の断簡零墨にいたる全資料を見ることができ、それが青森県近代文学館のあるべき姿。郷土文学資料の散逸を防ぎ、後世に豊かな文学遺産を引き継ぐこと……」

さて、今年、弘前市立郷土文学館は開館 30 周年の節目を迎えた。隣接する施設の工事とコロナ禍で、前半は長期の臨時休館や行事の中止・延期を余儀なくされた。後半もコロナ禍が続く中、企画展「岩木山と文学」記念トークイベント（出演：根深誠氏、藤田晴央氏）、開館 30 周年記念講演会（講師：三浦雅士氏）、そして文学講座とラウンジのひとときを、規模を縮小しながらも開催できたことは大いなる幸せであった。文学の本質を伝える深い内容はもとより、新しいテーマ設定や切り口など、「北の山嶺」の未来図を描くうえでの大きなヒントをいただいた。心より感謝申し上げたい。

ところで、館内での大きな収穫は、コロナ禍による長期の臨時休館を「活用」した資料点検および保管庫の整備であった。開館以来 30 年をかけて収集した資料を一点一点手に取り、点検し、保管庫に戻す作業を地道に続けるスタッフ 4 人の意欲と活力には目を見張るものがあった。小山内時雄先生が生きておられたら、彼女らの仕事に向かう姿勢にさぞ目を細められていたことであろう。一点一点手に取った資料への愛着や知識、逆境にめげずに前に進む推進力、これこそが、「北の山嶺」の未来図を描く原動力となるものと信じている。

（企画研究専門官 櫛引洋一）

資料点検を行いました

弘前市の「新型コロナ感染拡大防止のため公共施設等休止」の要請により、郷土文学館は 4 月 20 日～5 月 30 日に臨時休館した。

当館ではこの間を利用し、資料点検と保管庫の整備を行った。今までは業務の合間に少しずつ点検していたが、全資料を一斉に点検するのは、指定管理開始以来、初めてのことである。

資料は書籍をはじめとし、原稿、書簡、書幅など約 2 万点。保管庫の資料を全て展示室に移動して清掃するところから始まり、一点一点台帳と照らし合わせ、最後に保管庫に戻す、という作業を行った。

資料点検とは…資料が正しい場所に保管されているか、破損していないか、行方不明になっていないかを調べる業務のこと。



展示室を埋め尽くした資料



空っぽの保管庫